踏まれても踏まれても生き返る

いたばし雑草通信（ざっそう つうしん）

NO.13　2024.8.15

編集：発行　木村松夫
090-8646-9757
matsuokimura@gmail.com

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。鮮明画像の PDF でお送りします。

これは何だ！？　暑さがもたらす幻影

①路上で干からびた生き物のような物体を発見

夏の東京の気温は東南アジアの各都市よりも高温で、これはコンクリートとアスファルトで固められた東京の都市構造にも起因しているのではないかと思うのですが、実際、赤塚公園の崖線の下を歩くと結構涼しいのに、まちなかの街路は路面からの輻射熱で頭がくらくらしてきます。

土の中に棲んでいるミミズがあまりの暑さで地上に現れて、今度はアスファルトの熱さで死んでしまう光景はよく見られるのですが、この写真の物体もそうなのか？　ミミズよりは平べったいのでサナダムシかな？ 気持ち悪い～！ よ～く観察・考察した結果「クツヒモムシ」という「新物体」として認定。

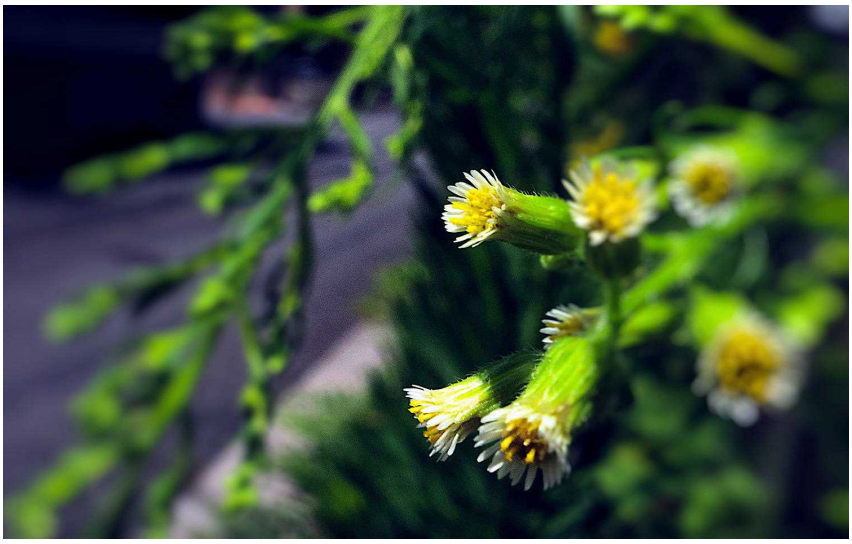
②セミと目が合って、ドキッ！

熱中症危険アラートが出ている中、久しぶりに帝京大学附属病院の北側の街路を歩いていると、さすがに人通りは少なく、ＪＲ社宅の木立からセミの鳴き声がしきりに聞こえてきました。ものすごく間近に聞こえるので目の前の木の枝を見上げて探したのですが、姿は見つからず。不思議だなあ、どこにいるんだろうと思って目線を下げたら、わたしの顔より低いところで木肌に溶け込んだ隠し絵のように止まっていました。

目線が合ってしまったので、いきががかり上、「こんにちは」とご挨拶したら、「なんだよこの野郎！　こっちは短い命を生懸命に生きているんだから、邪魔するんじゃねえよ！」と睨み返しています。

ご存じのように、セミは幼虫になってから、土の中で数年から10年ぐらい過ごし、成虫として地上で生きている期間はわずかに１週間ぐらい。その間に、結婚相手を探して次世代へ命を繋ぐ仕事をしなければならないのですが、10年前に生まれた時代とは異なって地面はコンクリートで固められている中での生命活動、さらにこれから10年後は土の地面はなくなってしまってるかもしれません。セミがとても生きにくい時代にしてしまったのはわたしたち人間。申し訳ないなと思います。

ヒメムカシヨモギ（キク科） ってこんなに小さかったか？



オオアレチノギクとヒメムカシヨモギは、いずれもキク科の秋の野草の代表的な種ですが、背丈が伸びて邪魔者扱いされるのもこの２種。オオアレチノギクには舌状花が観られず、雄蕊（おしべ）が目立っているのに対して、ヒメムカシヨモギにはちゃんと舌状花が広がっているのが大きな違いです。

改めてしっかり観ると立派な「菊の花」。でも、直径３㎜ぐらいの超小型。もともとこんなに小さかったかしら？

今秋は改めて観察のやり直しです。

ホナガイヌビユ（ヒユ科） とイヌビエ（イネ科）

語呂は似ててもヒユとヒエでは大違い！

右は比較のための参考写真：イヌビエ
→
←ホナガイヌビユ
（ページの右下は穂の拡大写真）

石神井川緑道帝京大学病院前の大改造後にも生き残っていました。

まだ石神井川緑道の観察・記録活動をしていた頃、左の植物を見つけて、穂の形からして「イヌビエに似ているけれど、違うよねえ」と首をひねっていたら、お仲間の行成んが「ホナガイヌビユですよ」と教えてくれました。当時は「『ヒエ』と『ヒユ』、どっちも食える植物で似たようなもの。もしかしたら言い方の違いだけでは」なんて、ひどく間違えた考えでいましたが、この２種はまったくの別物。

wikipedia ではホナガイヌビユは「葉は食用になる。ジャマイカではジルーと呼ばれ、モルディブでも料理に使われる。ほか、インドでも野菜として食され、伝統医学のハーブとして利用されている。葉以外の種子も水で茹でたり、ビスケットにしたり、スナックとしても食用可能である」と説明されています。

ヘエ～ッ、こんなに重用される植物がどうしてここに生えているのと感心させられるのですが、緑道の中でも土壌のひっくり返しが特に激しい帝京大学病院前のことだから、不思議が起こっても不思議ではありません。

それよりも、活動から引退したのに、**勉強課題が毎回のように出てきて、疲れる～！**